

町丸太町弘文堂發行。〔以上那波〕

● 出雲上代玉作遺物の研究

京都帝國大學文學部考古學研究報告の第十冊として標記の如き研究報告書が出版された。四六倍版、本文一〇二頁に附録として日本發見磨製石鏃及石劍聚成表一〇頁を收め、挿圖四十圖、附録圖版三圖の外に圖版三十九圖、附するに英譯二〇頁を以てした雄篇である。本文は濱田博士、島田・梅原兩助手の共同執筆に係り、附録は梅原・島田兩氏の作製したものである。

我國上世の文明を物語る片影は、幾多の方面に跡を留むるが、上代人が好んで佩用した玉類の如き、またその隨一たる事勿論である。本書は即ち出雲地方に中心を有する玉作の遺跡を研究し、遺物を調査し、更に玉の製作順序の過程を推考し、本邦に於ける玉の問題に觸れんごしたものである。故に先づ玉作の遺跡地たる八束郡玉造村・忌部村・大庭村の遺跡を概説し、玉磨砥石、玉類半成晶に對して極めて微細なる調査を遂げてその結果を或は圖版に、或は圖表として示し、轉じて玉の製作法に及ば

んごし、出雲及支那に於ける現代の攻玉法を調査し到底文獻上知り得べからざる各種の資料を獲、それを以て古代攻玉法の推考に供し、磨砂としては恐らく石英水晶等の細砂を使用して間に合せて居つたものであらうごか、穿孔法としては古い時代には舞鏝を両面から使用して目的を達した事もあつたらうし、またやゝ後には鐵鏝を手を以て廻轉するの安全を知つて、之を用ゐたであらうごか、穿孔を兩側からするのは硬玉・軟玉・琥珀等であつて水晶・璧玉・瑪瑙は片側からであつたごか、コ字形の勾玉は豫め穿孔したもので比較的後代（奈良朝又はそれに近い年代）の作で墮落的の形式のものであるが、古い時代のもものは全體の形式を先にし穿孔を後にしたのであるごか幾多の珍らしい教示を與へて呉れるものがある。考古學的の解釋に土俗學的智識を應用したものごして、成功したものである。

最後に於て「日本に於ける硬玉軟玉問題」に論及して居るのは、何人も最も聞かんごする所であり、且つ傾聽すべき點であるご信する。曰く、我國に於て石器時代の遺

跡及び古墳から發見せらるゝ所の玉類は大多數硬玉に屬し、僅かに少數の軟玉がある事は、支那三代及び漢代の古玉器が大部分軟玉に屬する事は、正反對の現象である。而してこの硬玉の主産地は緬甸の北部・雲南・西藏等であつて我國では絶えて出ないをすれば、硬玉は南方支那から直接か又は朝鮮半島を通過して我國に輸入されたもので、寧ろ南支地方に直接交通の結果得たものと見ても何等不穩當なものではない。また勾玉の搖籃が日本であるか朝鮮であるかは今日遽かに決定し難いが、勾玉の存する所は日本人の文化圏であるとは言ひ得よう。更に日本人の祖先が、支那人の璧圭の尊崇使用に刺戟されて玉類を尊崇佩用し同じ材料を使用しながらも、日本人特有の形式を飽くまで保存した所に、特殊の國民性があるとしてある。東京刀江書院發行、價八圓〔中村〕